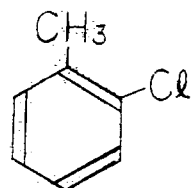


0-クロロトルエンの分解度試験成績報告書

1. 試験期間 昭和51年12月9日～昭和52年2月4日
2. 試料名 0-クロロトルエン (試料No K-299)

分子式 C_7H_7Cl

構造式



性状 純度 99.42%

沸点 159℃/760 mmHg

比重 1.0826

溶解性 水に不溶

(提示資料による)

3. 試験方法及び条件

環保業第 5号

薬発第 615号

49基局第 392号

微生物等による化学物質の分解度試験による

試験期間 4週間

3.1 試験装置

酸素消費量自動測定機

3.2 酸素消費量測定

3.1の記録による

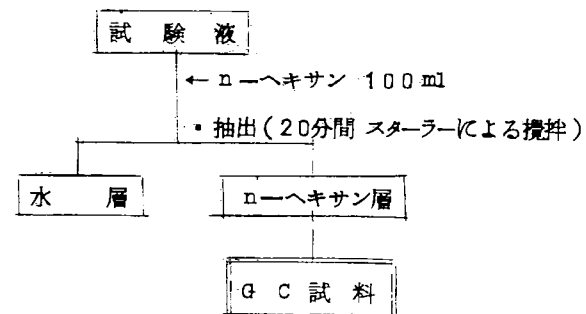
3.3 生分解試験後の直接定量法

(a) 使用分析機器

ガスクロマトグラフ 検出器 FID

以下次頁に続く

(b) 分析試料の前処理



(c) 分析条件

ガスクロマトグラフ (GC) 検出器 FID

キャリアガス N_2

充てん剤 10%アビエゾンL + 10%水酸化カリウム/クロモ
ソルブ WAW

ガラスカラム 2 mm ϕ × 1 m

カラム温度 50℃

4. 試験結果

	分解度 (%)	付 図	付 表
酸素消費量による結果	0	1	—
GC による結果	※	2	1

※ 揮散のため分解度算出せず (5. b) にて説明

以下次頁に続く

5. 備 考

(a) G Cによる直接定量の結果、14日後の汚泥系、水系の残留量は次のとおりであつた。

③ 水+試料 10.2 mg ⑤ 汚泥+試料 8.4 mg

④ 水+試料 7.4 mg ⑥ 汚泥+試料 9.3 mg

水系、汚泥系共、残留量にほとんど差がなく、図-1で酸素消費量の多い ⑤ 汚泥+試料 はクロメーターのもれによるみかけの消費量だと考えられる。

そこで間接法の計算は ⑥ 汚泥+試料 の1点で行つた。

(b) G Cによる直接定量の結果、水系の残留量が少なかつた。この原因として供試物質の揮散性が考えられるため、15日間の経時変化を調べたところ、15日後には約9%しか残留していなかつた。(図-3参照)

(c) 供試物質はクロメーター仕込時、下の方に粒状になり沈んでいたが、取出時には上に浮いていた。

以 上